

街の明かり 再び

帰還困難区域で解体指揮

福島原発事故7年
がんばっぺな
鹿児島人奮闘記

東京電力福島第1原発事故から、間もなく7年がたつ。福島県沿岸部の被災地には、「がんばっぺな（福島の方言で一緒に頑張ろうの意）」の言葉を胸に、復興に携わる鹿児島ゆかりの人がいる。使命を感じ、日々現場で汗を流す姿を追った。

（赤間早也香）

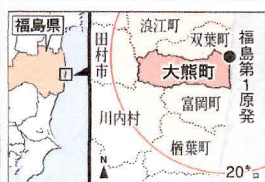
鹿屋出身の土屋尚典さん（42）



帰還困難区域内の家屋解体作業を監督する土屋尚典さん（右）
11月9日、福島県大熊町



東京電力社員寮が立つ一角の造成を担当した土屋尚典さん。「鹿児島の人にも復興へ進んでいる現状を知ってほしい」と話す＝2月9日、福島県大熊町



大手ゼネコンで現場責任者を務める土屋尚典さん（42）は鹿屋市出身。日々、単身住まいのアパートから、バリエードに封鎖された街まで約30分の距離を通る。原発事故で今も大部分が帰還困難区域となっている大熊町。7年前、住民が着の身のままの状態での避難

作業員が危険な作業をしていないか、被ばく防護をしっかりと行っているか気遣う。「安全に」「気を付けて」。声掛けを欠かさず、常に目を光らせている。

これまで、思い入れのある家を壊さなければならぬ、家主の悲しみや寂しさに、どれだけ触れてきたことか。アルパムや大切な家財を一緒に探しながら、思い出話を聞くことも多かった。だが、

進み、清水建設に就職。千葉の自宅に妻と2人の子を残し、福島に赴任したのは、原発事故から1年後の2012年4月だ。困っている人がいる。復興が必要」と福島勤務に迷いはなかったが、いざ現地に入ると明かり一つない夜の風景に言葉

を失った。以前、サッカー観戦で訪れたJヴィレッジが、プレハブと車庫で埋まっていたこともショックだった。物づくりの仕事を手

一昨年、福島第1原発が立地する大熊町の一角に、夜の明かりが戻った。廃炉作業に従事する東京電力の社員寮と食堂だ。昼間は一

時帰宅した住民の姿もある。造成工事を手掛けただけに、復興の歩みを感じられる最も思い入れのある場所だ。「戻ってきたいと思う人がいる限り、受け皿は必要。街の明かりが少しでも広がれば、やっぱり帰ろうと思う人が増えるかも」。避難生活が長期にわたり、帰還が難しい住民が多いことは理解する。それでも「にぎわう街を見届けたい」と願わずにはいられない。

ばならない、家主の悲しみや寂しさに、どれだけ触れてきたことか。アルパムや大切な家財を一緒に探しながら、思い出話を聞くことも多かった。だが、進み、清水建設に就職。千葉の自宅に妻と2人の子を残し、福島に赴任したのは、原発事故から1年後の2012年4月だ。困っている人がいる。復興が必要」と福島勤務に迷いはなかったが、いざ現地に入ると明かり一つない夜の風景に言葉を失った。以前、サッカー観戦で訪れたJヴィレッジが、プレハブと車庫で埋まっていたこともショックだった。物づくりの仕事を手